

第55回（平成22年度）公開研究発表会 音楽科発表要項

音楽を愛好する心情を育てる音楽科学習指導の在り方
－音楽における活用型学習の再検討－

近藤 円佳

1 研究テーマ設定の趣旨

平成20年3月に改訂された新学習指導要領では、教育基本法改正等を踏まえ「生きる力」の育成を引き続き目指すこととして、確かな力、豊かな心、健やかな体の調和のとれた育成を重視している。音楽科においても、改善の基本方針として次の4点が示された。

- ・ 音楽のよさや楽しさを感じるとともに、思いや意図をもって表現したり味わって聴いたりする力を育成し、生涯にわたり音楽文化に親しむ態度をはぐくむこと。
- ・ 音楽活動の支えとなる指導内容を〔共通事項〕として示し、音や音楽を知覚しそのよさや特質を感じ取り、思考・判断する力を育成すること。
- ・ 創作活動では音楽をつくる楽しさを体験させ、鑑賞活動では音楽の面白さやよさ、美しさを感じ取り、根拠をもって自分なりに批評することができるような力を育成すること。
- ・ 我が国や郷土の伝統音楽の指導を一層充実させること。

このような方針を受け止め、「生きる力」の育成に重要な役割を担う音楽科教育の在り方を追求しなければならない。

一方私たちの日常生活に目を向けてみると、様々な音や音楽が満ち溢れている。例えば、お店やレストランに入ればBGMや有線放送が流れている。テレビやラジオをつけても、音楽番組はもちろん、映画やドラマ、CM等からも、クラシック音楽や歌謡曲、ジャズなどたくさんのジャンルの音楽や音を耳にすることが多い。このように音楽は、私たちの生活に欠かせない存在となっている。しかし、これら一つ一つの音楽の価値に気付かずに聴き過ごしていることは、とても残念なことである。

そこで、音楽の授業では、生徒一人一人の感性を豊かに育てるために、様々な音楽を教材として扱い、音楽活動によって生まれる喜びや楽しさを実感させるとともに、音楽を形づくっている要素を知覚し、音や音楽のよさや美しさを感じ取らせながら思考・判断し表現する一連の過程を大切にしていきたい。

そのために、どのような学習活動を展開していくべきなのか、どのようなことを学ばせたいのかという本質的な部分を明確にするとともに、授業や題材の指導計画の中に習得した知識や技能を活用するという学習の在り方を検討していくことは、大切なことと考える。

また本校では、平成17年から3年間、「コミュニケーション能力の育成と活用」に焦点を当て研究を行ってきた。その結果、コミュニケーション能力を育てるためには、他者

との関わりが重要であることが明らかになった。音楽の授業でもグループ活動を通して、他者との関わりを持ちながら課題を解決していく授業を実践してきた。これまでの研究を引き継ぎ発展させ、平成20年度から、3か年計画でテーマを「新しい時代に対応した授業の在り方」、サブテーマを「活用型学習活動の実践を通して」と設定し研究を進めてきて、音楽科においても、習得した知識・技能を活用していくことで、知識・技能が生きたものとなり、他者とのコミュニケーションによって、思考・判断する力や表現する力が深まり、音楽科の目標を達成できるものと考えた。

そこで、音楽科の研究テーマを「音楽を愛好する心情を育てる音楽科学習指導の在り方」、サブテーマを「音楽における活用型学習の再検討」と設定し研究を進めていくことにした。

2 研究計画

1 第1年次（平成20年度 公開研発表）

- (1) 音楽科の活用型学習活動のとらえ方の検討
- (2) 活用型学習活動に視点を当てた授業改善の手だての検討

2 第2年次（平成21年度 公開研発表）

- (1) 音楽科での活用型学習活動の考え方の修正
- (2) 活用型学習活動に視点をあてた授業改善の手だての実践

3 第3年次（平成22年度 公開研発表）

- (1) 活用型学習活動に視点を当てた授業改善の手だての考察
- (2) 研究のまとめと今後の課題

3 研究内容

1 音楽科でいう活用型学習とは

様々な音楽活動を通して基礎的・基本的な知識・技能を習得するにあたっては、感受性を大切にし、表現したいイメージをもつことと関わらせて指導することが重要である。指導にあたっては、音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚させ、その習得した力を活用して、表現や鑑賞の活動において活用させることが大切である。

音楽に対するイメージをふくらませることができるとともに、意図を明確に持って表現する活動や、鑑賞した音楽に対して、根拠をもって自分なりに批評するような活動ができる。このような活動を通して、思考力・判断力・表現力を育てることができるであろうと考えた。

このような授業展開を仕組んでいく上で、次の三つの手だてが有効であると考え、実践した。

①楽しく生き生き表現活動ができるための支援の工夫

音楽における音声言語表現の工夫、歌詞内容や音楽用語の理解という観点から音楽の「現象」を言葉で説明することができても、「言葉の終わったところに音楽が始まる」と

いう名言があるように、その「本質」を受容することは難しい。中学生という多感な年頃の人間と接しながら、彼らの表現する力を伸ばしていくことは難しいことである。そのため、楽しく生き生きと表現させるためにも教師の支援の工夫がこれまで以上に大切だと思われ、この積み重ねが本当の意味での活用する力をはぐくむのではないかと考える。例えば、単に知識を教え込むのではなく、音楽的感受の観点から活用する知識・技能・考え方を明確にし提示することとか、発問を工夫し、今までに学んだ知識や技能を思い出させたりすること等があげられる。

②様々な感性にふれることができる教材の開発

これまで様々な教材を使用してきたが、楽しい授業を構築するためには、ねらいに即した魅力ある教材を選択することが重要である。優れた教材の共通点は、生徒が興味・関心を抱くこと、多様な音楽的要素を含んでいることである。そして、そのような様々な要素を含んだ教材を活用して系統的に学習していくことが重要である。そのためには、年間指導計画を見直し、教材の配列を考えていかなければならない。また、同時に習得すべき知識・技能と育成すべき能力の関連についても明確にする必要がある。

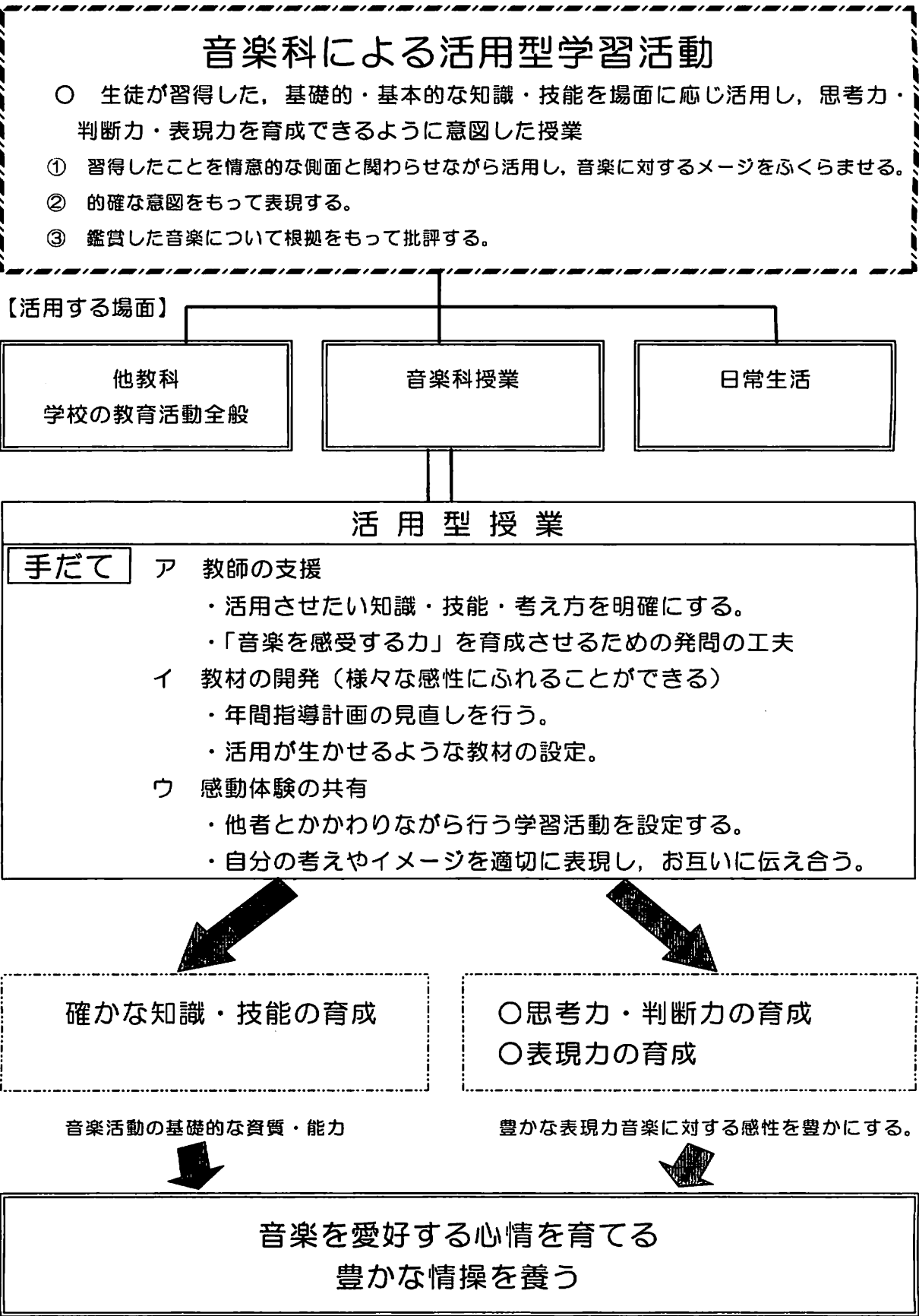
③体感することで表現する喜びを共有できる場の設定

音楽は「調和」を大切に考えていく教科である。例えば、息や気持ちを合わせたりし、集団の心が一つになったときの、言葉では言い表すことができないほどの感動や、音と音が溶け合って、一体感あるハーモニーを奏でたときの喜びは感動体験の共有になる。このことが人と人とのつながりや音楽の調和につながり、豊かな心をはぐくんでいく大きな力になると考える。そのためには、音で表現する喜びを体感できる場をより多く設定したり、表現し合える人間関係づくりをサポートしたりしていくことが必要である。



2 研究構想図

前述のことを図で表すと次のようになる。



3 活用型学習活動に視点を当てた授業の実際

(1) 授業の実際

音楽科として活用型学習活動を取り入れた授業の一例を紹介する。

題目・内容項目	創作を楽しもう！（合唱曲へのアレンジ）
学 年	第3学年
本時のねらい	・音楽の様々な諸要素を生かして、単旋律の楽曲を合唱曲にアレンジすることができる。
活用型学習活動を通して育てたい力	・主な旋律の進行を大切にしながら、音楽の諸要素を活用して創作していく力。 ・それぞれのグループで演奏を発表し、共通事項を窓口として表現のよさや工夫している点について意見を交換し合える力。
中教審答申における活用型学習活動例との関連	① 体験から感じ取ったことを、表現する。 今まで生活の中や音楽の授業を通して体験・習得したものを生かして、グループで話し合いや演習の中で自分たちが表現したい楽曲にしていく活動。
何を活用させたのか	・日常の中で体験的に学んできたこと ・音楽の諸要素〈メロディ・ハーモニー・リズム・ダイナミクス・形式〉などの技法

1 題材名 創作を楽しもう

2 目 標 (1) 音楽の諸要素の働きを生かして表現を工夫することができる。
(2) 互いに感じ取ったイメージを発表し合い、自己の感受性の幅を広げることができる。

3 題材の要旨

(1) 題材設定の趣旨

我々の生活の中には、たくさんの音楽が存在しており、生徒たちは時には意識的に、時には漠然と耳にして生活している。なかでも、ポピュラー音楽には数多く親しんでいる。

しかしそのポピュラー音楽が音楽の様々な諸要素（リズムや和声や旋律等）のかかわりをもって多様な音楽になり、より一層、音楽にふくらみができていることには気づいていない生徒が多い。そこで、生徒たちが親しんでいるポピュラー音楽を教材に、今まで習得・活用してきた学習内容を生かして編曲の創作活動を行うことによって音楽的な感性や表現力を高めていけるだけでなく、生涯音楽を愛好する心情を育てることができるのではないかと考え、本題材を設定した。

(2) 教材観及び指導方針

本校では、全学年にわたり創作活動ができるよう、指導計画を検討した。今年度の各学年における指導内容は下記に示す。

教材に選定した「Hey Jude」(Lennon&McCartney)はビートルズの作品である。ビートルズは世界的アイドルとして成功を収める一方、彼らの作り出した音楽は1960年代以降のロック・ポップスシーンに多大な影響を与えることになった。その楽曲の普遍性、革新性は現在に至るまで高く評価されており、バンド音楽、ポップス音楽を芸術に高めた功績も非常に大きい。このように今日でも親しまれている楽曲を演奏する意義は大きいと考える。

「Hey Jude」は旋律のまとまりを感じながら、原語歌詞で歌うことを通して、歌詞のもつリズムやアクセントがメロディーと一体となって独特なリズムやシンコペーションが生まれていることも知ることができる。楽曲の構成も(A・B・Coda)からできていることも容易に理解しやすい。またコード進行も比較的易しいため、ハーモニーの変化を感じ取りながら歌唱しやすい。授業を展開するにあたっては、「Hey Jude」をまとまりごと(A-1・A-2・B・A-3の4グループ)に分ける。それぞれのグループにはソプラノ・アルト・男子パートを設け、自分たちでアイディアを出し合って曲の創作する活動を取り入れた。また練習していく中で、意見交換をしながらよりよい楽曲に仕上げる過程の場を設定した。

これらの手立てにより、音楽における学力が実現でき、音楽的な感性や表現力を高めていけるだけでなく、生涯音楽を愛好する心情を育てていきたいと考える。

4 授業の実際

- (1) 題材 創作を楽しもう
- (2) 教材 「Hey Jude」 Lennon&McCartney
- (3) 目標 音楽の諸要素の働きを生かして表現を工夫することができる。
- (4) 目標設定の趣旨

この題材で楽しさを生徒が感じる場は、三つあると考える。まず、一つはよく知っている旋律が、様々な音楽の諸要素を活用し、より新たな音楽を発見することである。二つ目は、基本的な奏法だけでない異なる表現ができたり、表現したいイメージを意見交換し合ったりしながら表現力を高めていく場である。三つ目は、自分たちで考えた表現を組み合わせ、演奏発表する場である。

本時は様々な音楽の諸要素を活用し、グループ活動していくことにより、生徒が「学ぶ楽しさ」を実感できる授業を展開する。中学校での創作活動としては、生徒たちにとって最後の取り組みなので、様々な支援を工夫していきたい。また、グループ活動で工夫した表現を、意見交換をしながら自分たちの音楽をつくっていく中で、感動体験の共有をさせたい。そのためには様々な音楽の諸要素をいかし、表現の効果を感じ取ることが大切であると考え。また、表現したいイメージを自由な発想で表現することができることで、より豊かな表現力がつくだけでなく、この題材によって、音楽における学力を高めることができたかどうか検証できるのではないかと考え、この目標を設定した。

(5) 授業の観点

様々な音楽の諸要素を活用し、表現の効果を感じ取り、表現したいイメージを自由な発想で表現することができることは、音楽の魅力を実感させるために効果的な手立てであったか。

(6) 準備 ピアノ 学習プリント 楽譜 等

(7) 観点別評価

評 価 の 観 点	題 材 の 評 価 規 準
規準(2) 音楽的な感受や表現の工夫	様々な音楽の諸要素を活用し、自分たちのアイディアを生かして、演奏表現を工夫しようとしているか。

(8) 展開

◎「研究主題にせまるための手だて」との関連

学 習 活 動	教 師 の 支 援 及 び 評 価
1 学習課題を確認する。	・ 本時は、編曲をする創作活動であり、グループで考えた創作表現を、話し合いや、演習の中で自分たちが表現したい楽曲になるようにする学習活動であることを説明し、活動への意欲を促す。
2 前時に学習したことを振り返る。	・ 前時に学習したことを確認し、「Hey Jude」の旋律を歌い全体の流れを感じさせる。
3 「Hey Jude」をグループごとに、意見を出し合いながら表現活動をする。	◎グループごとに、「Hey Jude」をどう表現したらいいのかを、意見を出し合いながら練習できるように働きかける。 ・ 和声上での進行に無理がある場合やオブリガート（助奏）の音の跳躍に無理がある場合は、教師によるいくつかの成功例を提示し、選ばせる。 ・ リズムを躍動的にしたい場合は、ビートを刻ませるようなスキットをいくつか示す。 表 ・ 活動が停滞しているグループには学習プリントを有効に利用し、グループ内で表現活動が円滑に進められるようにする。 ・ 表現のよさや工夫した点についても考えさせる ・ 工夫した点が、表現したいことと合っているかどうか注意して聴き、練習できるように助言する。 ・ さらによい表現になるように、互いの気持ちを合わせて発表できるよう支援する。 対人意識

— 評 価 —

☆自分たちのアイディアを生かして、創作表現を工夫しようとしているか。

< 規 準 (2) > 観 察

4 それぞれのグループの演奏を聴き、表現のよさや工夫する点について、意見を交換し合う。

5 本時の学習を振り返る。

・他のグループの工夫した点を考えさせる。

思

・聞き手に感情が伝わるように表現させる。

対人意識

・意見交換をもとに、発表したグループの工夫した点などを取り上げ、賞賛する。

・本時の活動について賞賛することで、次時の活動への意欲を促す。

(9) 指導上の留意点

音楽は音の響きであるが、その音の響きを私たちが心地よいものと感じたり、心を揺さぶられたり、はっとしたりするのは、私たちがその音の響きと対話しながら、それを読んでいるからである。それは比喩的な意味ではない。おそらく私たちは意識・無意識は別として「内言」によって音の響きを読んでいるはずである。だからベートーヴェンのソナタに共感し、バッハのフーガに心を動かされるのである。今回の授業展開は「内言」を「外言」として捉え直しながら進行する授業である。

(10) 題材の流れ

1	Hey Jude を斉唱で歌えるようにする。 *ここでの取り組みがのちの活動につながっていくので、生徒の興味や関心をよりいっそう深めるために、ビートルズの音楽の多様性を示しながら、実際に弾き語りや映像を見せる。
2	教師が簡単に創作したHey Judeの合唱曲を実際に歌ってみる (創作意欲を高めるようなしかけを仕込んでいる 例：A2 から B に移行するとき、楽曲を知っていれば自然的には盛り上がっていくのだが、アレンジされている楽曲には盛り上がらない演出が仕掛けである。 わざと歌いにくい、低い音域を作っておく。 よい部分・生徒がまねしたい部分も適度に残しておく クラスの特性によって、変えておく。)
3	グループに分かれて、教師の創作した曲を歌う 教師の手だて1 グループ分けの工夫 Hey Jude をA1 - A2- B -A3 の4部に分け、それぞれ10名程度のグループで創作する。

	どのグループも、ソプラノ・アルト・テノール等いくつかのパートに分けるが、1パートを担当する人数が1～2名ずつになるため、全員が高い意識を持って創作に関わることができるグループとなる。
4	<p>グループ毎に創作活動を行う</p> <p>教師の手だて2 アドバイス</p> <p>(1) 一つのグループを教師の周りに集め、一人一人やりたいこと・表現したいことを語らせ、<u>アドバイスする</u></p> <p>(2) 残りのグループは、創作・練習・楽譜を書くなどの活動を行う</p> <p>(3) (1)・(2)をくり返す</p> <p>例) 和声上での進行に無理がある場合 ⇒いくつかの成功例を提示し、<u>選</u> <u>ば</u> <u>せる</u></p> <p>オブリガート（助奏）の音の跳躍に無理がある場合 ⇒ //</p> <p>リズムを躍動的にしたい ⇒ビートを刻ませるようなスキヤットを示す</p>
5	<p>グループ毎に発表する</p> <p>A1 A2 B A3</p>
6	<p>順番替え（A1 A2 A3）は生徒の話し合いで行い、Bと合わせて、学級で一曲にする</p>

(11) 授業の様子

○生徒は、息遣い、リズムがグループの課題となっていることを自覚はしていた。それを実際にピアノの周りに集まったときに、教師がその状況を鋭く見ぬき、的確なアドバイス（**ブレスの位置、フレージングの工夫例を挙げる**）をした。

○グループ練習の時には、音程の確認などに終始していたようだが、教師のアドバイス（**音程だけでなく相手意識を持って表現することの大切さ**）を受け、教師に聴かせようとする意識が働いたため、表現が向上していた。

○グループの歌い方に合わせて伴奏したり、指を鳴らさせたりすることで、テンポのずれを自覚させると、生徒の中に、合わせる意識が生まれた。

○アルトパートの生徒が、自分でピアノの所へ行って、音程を確認していた。（自分たちの音が外れているのを、教師のアドバイスにより気付いた）

○教師が具体的な表現を示すと、生徒がその技法を模倣してみようという意識が高まり、次第に豊かに表現されていった。生徒自身も表現の向上を自覚し、満足感が生まれた。さらに豊かに表現してみようという意欲が高まっていた。

○男子が、LaLaLaの音程をとれなかったので、女子に教えてもらい、何度も練習する場面が生まれた。この楽曲は、男子にとってはレベルが高いと思っていたのだが、教師のアドバイス（**音が跳躍したときのイメージの持ち方**）についてアドバイスした。しばらくして、再び指導に向かったところできるようになっていた。

4 成果と課題

本校音楽科では、本研究の実践を通して、本年度は、「音楽を愛好する心情を育てる音楽科学習指導の在り方」を研究主題に、3年計画の3年次として、授業における活用型学習活動を取り入れてきた。その結果、以下のような成果と結果が明らかとなった。

(1) 成果

- ア 研究主題、研究目標及び研究計画の設定を行い、身に付けさせたい力を明らかにすることができた。
- イ 教師の意図した表現を実現するという受け身の学習ではなく、活用を取り入れ活動の中で、思考・判断し、創造性を発揮するという主体的な音楽活動を進めていくことができた。
- ウ 音楽の諸要素に関連させながら、音を音楽へと構成していく力を高めることができた。
- エ 生徒同士で意見交換させることによって、創作していく過程を大切に、互いの意見を聞くことでイメージしたものを表現することができた。
- オ 身に付けた力を自ら活用させていくための教材の開発や指導の工夫を明らかにし、それぞれの学年の教材に取り入れたり、授業に生かしたりすることができた。

(2) 課題

- ア 活用型の学習として今回の手だて以外にも様々な方法が考えられる。他の手だてでは、どんなことがあるのか、今後とも追求していく必要がある。また、授業の中でどのような場面で、どのように手だてを講じていけばよいかという点について、もっと研究を深めることも大切である。
- イ 生徒一人一人能力差がある。個々に応じた活用の手だてについても考えていかなければならない。

今回の研究で、習得・活用・探求の活用に焦点をあてたことにより、確かな知識・技能の習得と、自ら学び自ら考える力、すなわち探求していく力の両方をスパイラル的に培っていくことが大切であるとわかった。

〈参考・引用文献〉

- ・文部科学省「中学校学習指導要領（平成20年9月）解説―音楽編―」教育芸術社 2008
- ・横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校編「習得・活用・探究の授業をつくる」PISA型「読解力」を核としたカリキュラム・マネジメント 三省堂 2008
- ・彌政きょう介編著 中学校 音楽科編～資質・能力を育てる～ 明治書店 2001
- ・「中学校の音楽 2/3下 研究編」教育芸術社
- ・「第51回 関東音楽教育研究会栃木大会」要項 2009

Hey Jude

Lennon & McCartney

A1

Soprano: hey Jude don't make it bad. Take a sad song and make it better. Be-
Tenor: hey Jude don't make it bad. Take a sad song and make it better. He-
Bass: hey Jude don't make it bad. Take a sad song and make it better. He-

* 2 = Y's の効果

we bet to let her in to your heart Then you can start to make it bet-ter Bet
we bet to let her in to your heart Then you can start to make it bet-ter
bet-ter to let her in to your heart Then you can start to make it bet-ter Bet

A2

Jude don't let me down You were made to go out and get her Ho-
la la la la la la You were made to go out and get her The
Jude _____ You were made to go out and get her The

eleven: sit up you let her under your skin Then you be gir-ly to make it bet-ter
sit up la X リズカルのリズム la Then you be gir-ly to make it bet-ter
sit up la la Then you be gir-ly to make it bet-ter

B

X あんな空気にしてる
X いまは盛り上げたの。 la la la la la la la la la la

And as always you feel the pain Hey Jude to train Don't care if the world up on your shoulders

III-3 ver

2

How Jude

21

S: la la For well you know that it's a fool. Who plays it cool Be man the new world

A: la la la la la

T: de la la la la la la la la

*リズムを単調に(こえりこい)

24

S: a lit the cold er da da da da da da da da da

A: la la la da da da da da da da da da

T: la la la da da da da da da da da da

A3

S: おえ? 空? あいて?

A: 創作を欲を上げる

T: Hev

30

S: Jude. don't let me down You have found her now go and get her

A: Jude. don't let me down You have found her now go and get her

T: Jude. don't let me down You have found her now go and get her

34

S: men ber to let her in to your heart. Then you can start to make it bet ter

A: men ber to let her in to your heart. Then you can start to make it bet ter

T: men ber to let her in to your heart. Then you can start to make it bet ter

* 音とエにのせていく、手紙を教える

38

S: la la la la

A: la la la la

T: la la la la

* フットワークを入りやすくする